

共通テスト導入と「新課程入試」の中間で
「波静か」なはずの2023年一般選抜はどう動いたのか？

☑ 入試トレンドをチェック!

2023年

入試結果を 徹底分析!

経済不安は影響しつつも大都市圏志向が復活。
共通テスト(以下、共テ)は数学など平均点アップ、
国公立大志望者は「初志貫徹」の出願傾向を見
せた。一方、私立大一般選抜は人気低下、「チャ
レンジ志向」と「年内入試シフト」に二極化した。



ここでは、2023年一般選抜の結果を、共テ、国公立大、
私立大の別に分析した。2024年入試へ向けて、全体トレ
ンドの把握の一助となれば幸いだ。

なお、個々の大学の入試結果は、1227ページからのデ
ータを参照してほしい。

[本誌:小林弘明]

✓入試トレンドをチェック!

共通テスト

POINT

前年の大幅難化の反動か、平均点は大幅アップ。数学I・A、II・Bの易化が影響大。ただし、長文化、複雑化が進んだ思考力問題に苦戦。



導入3年目の大学入学共通テスト(以下、共テ)は、本試験が1月14・15日、追・再試験が1月28日・29日に実施された。追・再試験はコロナ対応で、全都道府県に会場が設置された。

高校卒業者数が前年比で2.1%減少した(旺文社推定)こともあり、共テの志願者は51万2,581人で前年比3.4%減。それでも全受験生の約8割が出願した(旺文社推定の受験生数から算出)。志願者のうち、現役生は2.8%減、既卒者は6.7%減少。そして、実際の受験者は47万4,051人(前年比2.9%減)で、受験率は92.5%に留まった。

国公立大一般選抜では原則、共テの受験が必須で、共テを課す学校推薦型・総合型選抜も増えた。また、私立大の約9割が共テ利用方式を実施するため、共テの難易がその年の入試全体の動向を左右すると言っても過言ではない。ここでは、2023年共通テストの結果を総括する。

数学I・A、II・Bの平均点が大幅アップ、理科②で得点調整

2023年の共テでは、図表1・2の通り、平均点は各指標でアップした。国公立大文系・理系に共

通の5教科6科目の加重平均点を算出すると453.9点(得点率56.7%)で、前年より29.0点アップ。センター試験(以下、セ試)時代を通じても低い方ではあるが、それでも受験生の「初志貫徹」の出願を後押しする結果となったのは確かだ。

図表3・4に各科目の詳細を示した。特に、22年に大幅難化した数学I・A、数学II・Bの平均点アップが注目される。22年より誘導が丁寧になり、計算量も減少したことが要因と見られる。こうした文理共通の基幹科目の易化は、国公立大への出願を後押しするケースが多い。

この他、日本史B、化学も平均点アップ。一方、英語リーディング、「倫理、政治・経済」、世界史Bなどがダウンした。

理科②では中間集計の段階で科目間(物理と生物)の平均点差が20点を超えたため、得点調整が行われた。その結果、最終的に生物で8.7点、化学も5.5点上乗せされたことも、全体の平均点を押し上げる要因となった。それでも、生物はセ試以来、過去最低を更新した。

全体に21・22年と同様、対話形式など問題文が長文化、複雑化し、複数資料や図表類の組み合わせ

図表1 センター試験・共通テスト 平均点の推移(本試験/5教科6科目の加重平均点/800点満点)



※大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数から算出(センター試験の理科「基礎科目」は追・再試験含む)。国語(200点満点)の平均点、地歴と公民を合わせて1教科1科目とした加重平均点(100点満点)、数学①の加重平均点(100点満点)、数学②の加重平均点(100点満点)、理科①と②の加重平均点(100点満点)、外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。2015年は旧課程対応の経過措置科目を含む。2015年・2021年・2023年は得点調整後の平均点。また、2021年は「第1日程」の集計。

図表2 [参考] 2023年共通テスト
基幹3教科の平均点合計(600点満点)

教科・科目	平均点(得点率)		平均点の 対前年差
	2023年	2022年	
国語+数学I・A+数学II・B+英語	339.0 (56.5%)	312.5 (52.1%)	+26.5

※図表2・3・4ともに大学入試センター発表資料をもとに作成。平均点は小数第2位を四捨五入しているため、平均点の対前年差は、表中の「2023-2022」と一致しない場合がある。英語の平均点(200点)は「リーディング」(100点)＋「リスニング」(100点)の合計。

図表3 2023年共通テストの
科目別受験者数&平均点(本試験)

教科 (満点)	科目	2023年		2022年	平均点の 対前年差	
		受験者数	平均点	平均点		
国語 (200点)	国語	445,358	105.7	110.3	-4.5	
地理歴史 (100点)	世界史A	1,271	36.3	48.1	-11.8	
	世界史B	78,185	58.4	65.8	-7.4	
	日本史A	2,411	45.4	41.0	+4.4	
	日本史B	137,017	59.8	52.8	+6.9	
	地理A	2,062	55.2	51.6	+3.6	
公民 (100点)	現代社会	64,676	59.5	60.8	-1.4	
	倫理	19,878	59.0	63.3	-4.3	
	政治・経済	44,707	51.0	56.8	-5.8	
	倫理、政治・経済	45,578	60.6	69.7	-9.1	
数学① (100点)	数学I	5,153	37.8	21.9	+16.0	
	数学I・A	346,628	55.7	38.0	+17.7	
数学② (100点)	数学II	4,845	37.7	34.4	+3.2	
	数学II・B	316,728	61.5	43.1	+18.4	
	簿記・会計	1,408	50.8	51.8	-1.0	
理科① (50点)	情報関係基礎	410	60.7	57.6	+3.1	
	物理基礎	17,978	28.2	30.4	-2.2	
	化学基礎	95,515	29.4	27.7	+1.7	
	生物基礎	119,730	24.7	23.9	+0.8	
理科② (100点)	地学基礎	43,070	35.0	35.5	-0.4	
	物理	144,914	63.4	60.7	+2.7	
	化学	182,224	54.0	47.6	+6.4	
	生物	57,895	48.5	48.8	-0.4	
外国語 (200点)	地学	1,659	49.9	52.7	-2.9	
	英語	リーディング(100点)	463,985	53.8	61.8	-8.0
		リスニング(100点)	461,993	62.4	59.5	+2.9
		合計(200点)	—	116.2	121.3	-5.1
	ドイツ語	82	123.8	124.3	-0.5	
	フランス語	93	131.7	113.7	+18.0	
	中国語	735	162.8	164.8	-2.0	
韓国語	185	158.5	144.7	+13.8		

(注) 大学入試センター発表の最終確定値(1月14・15日の本試験)。小数第2位以下を四捨五入。／英語の合計平均点はリーディングとリスニングの平均点の合計。／2023年は得点調整を理科②で実施(上表は調整後の得点)。

せなど、高速の情報処理能力を要し、知識を用いて正解に導く思考力を問う出題が目立った。受験生は読解で消耗し、時間不足に悩んだと見られる。

**「現行課程」最後の2024年
共通テストの難易はどうか?**

2025年から、現在の高校1・2年生が学ぶ「新課程」による共テが行われる。新教科「情報」、地歴・公民・数学の科目構成の変更、国語の「実用的な文章」など、現行の共テと異なる要素が多い。既卒生に対する経過措置(現行課程に基づく選択問題など)はあるが、従来と異なる対策が必要だ。

現行課程最後の2024年共テはどうか。過去のセ試の事例を見ても、制度の導入4年目は出題レベルが安定するのと、「新課程入試」を次年度に控えることから大幅な難易変動は考えにくい。

とはいえ、大学入試では「前年の反動」がよく見られる。これは、志願者数や平均点の増減が繰り返される現象を指す。平均点がアップ(ダウン)した科目は、翌年に出題レベルが調整されることがあるのだ。特に数学I・A、数学II・Bは計算量の増加などでやや難化が見込まれる一方、得点調整の原因となった生物の易化が予想される。また、国語では「新課程」共テの先取りとして「実用的な文章」を複数資料の中に組み込む可能性もある。

さらに、23年に続き、会話型・対話型問題文はどの教科・科目でも増えると見られる。

もし平均点が下がっても、それは全ての受験生に平等だ。自分だけ得点できなかったと思ひ込み、過度に弱気になる必要はない。勇気を出して初志貫徹し、合格したケースは多いのだ。自己採点集計結果を冷静に分析しよう。

図表4 平均点アップ・ダウンの主な科目

↑ 平均点アップ	数学II・B	+18.4
	数学I・A	+17.7
	日本史B	+6.9
	化学	+6.4
↓ 平均点ダウン	倫理	-4.3
	国語	-4.5
	政治・経済	-5.8
	世界史B	-7.4
	英語リーディング	-8.0
	倫理、政治・経済	-9.1

※数値は対前年の平均点差。化学は得点調整後の数値。

✓入試トレンドをチェック!

国公立大一般選抜



共通テストの平均点アップが後押し、国公立大志望者は「初志貫徹」。
大都市圏の難関～準難関校が志願者増、中堅校では前年の極端な反動も。



2023年入試では、国公立大の個別試験(2次)の確定志願者数は前年比1%減(別日程の3大学・1専門職大学を除く)。共テの志願者減(3.4%減)など基本ベースの縮小に対し、底堅い人気を示したといえる。また、大都市圏の難関～準難関校で増加が目立った。

そして倍率(志願者÷合格者。以下同じ)は、前期が「国立大2.5倍、公立大2.6倍」で変動がなく、国立大後期が7.5倍→7.6倍とアップしたが、公立大中期は6.7倍→6.4倍、同後期も8.8倍→8.7倍にダウンとやや対照的。こうした結果になった要因として、次の3つが考えられる。

- 1 共テの平均点アップ(特に数学Ⅰ・A、Ⅱ・B)が、国公立大への出願を後押しし、幅広い学力層の「初志貫徹」の出願傾向に結びついた。
- 2 コロナ禍対応が進み、遠隔地受験への心理的ハードルが下がったことも、大都市圏の難関～準難関校の志願者増につながった。
- 3 一方、共テの平均点アップで目標ラインが上がり、公立大にぎりぎり手が届く学力層が、募集枠が小さい後期の出願をあきらめた模様。

り、公立大にぎりぎり手が届く学力層が、募集枠が小さい後期の出願をあきらめた模様。

理系の資格志向が顕著、工は減少 一橋大・横浜国立大が大幅増!

【学部系統別の志願・合格状況】

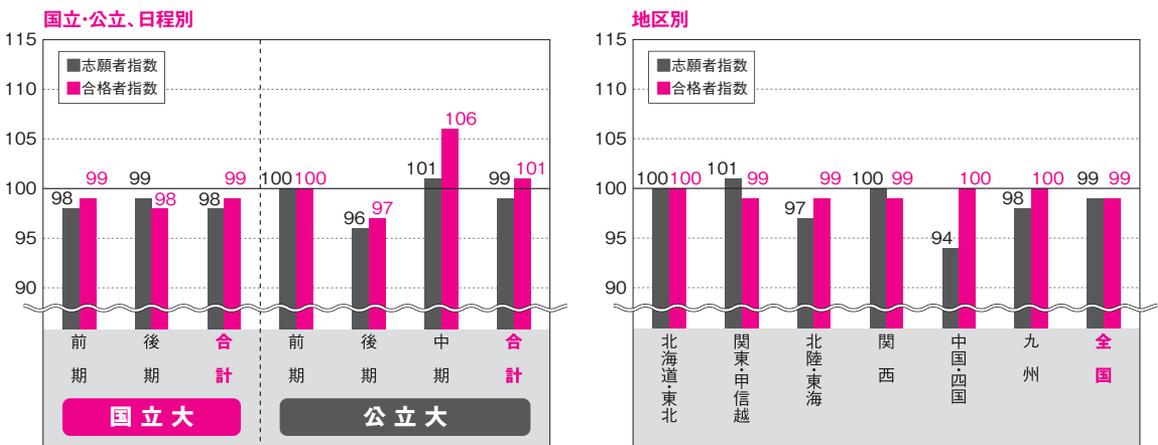
医、歯、薬、医療・看護といった医療系の志願者増が目立つ。農・水畜産・獣医も微増で、「理系の資格志向」が見て取れる。ただし、国の理工系拡大の方針転換で新設や定員増が相次いだにもかかわらず、理、工は志願者減となった。

文系では文・教育・教養、国際・国際関係、外国語が大幅減。一方で、経済・経営・商は微減に留まり、就職事情の改善など「コロナ後」を見据えた志願動向として注目される。

【地区別の志願状況】

【北海道・東北】北海道大は前年比3%増、後期(10%増)への併願増が目立った。一方で東北大は8%減、関東地区の準難関校への志望変更か。前年の

図表5 2023年 国公立大一般選抜の志願・合格状況(2022年を100とした指数)



※データは全て、独自日程で入試を行った国際教養大、新潟県立大、観音大および芸術文化観光専門職大を除く。文中、増減率は対前年、倍率は「志願者数÷合格者数」。倍率の変化は「2022年→2023年」で示している。

▶国公立大一般選抜の全体イメージをつかもう!

2023年入試	前期	後期	公立大中期
募集人員	8.0万人	1.6万人	0.2万人
志願者数	23.1万人	16.0万人	3.2万人
受験者数	21.5万人	7.1万人	2.0万人
合格者数	9.1万人	2.1万人	0.5万人

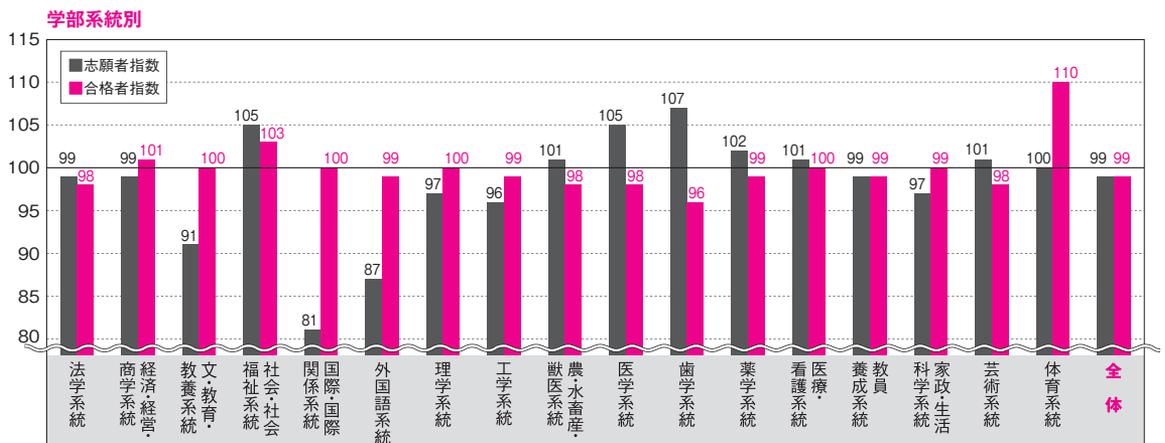
※募集人員、志願者数は文部科学省資料。その他は旺文社集計

国公立大志願者は、大半が前期に受験するのが一般的だ。とすると、2023年入試では21.5万人が実受験者数の近似値となる。この21.5万人が約11.6万人の合格枠を競い合ったというのが国公立大2023年一般選抜の全体像だ。後期の志願者数は16.0万人もいるが、前期で合格した入学手続き、私立大への入学手続きなどが抜け、実受験者数7.1万人まで減り、高かった志願倍率が実質倍率でぐんと下がるという構図だ。

反動で、北海道教育大(22%増)・宮城教育大(49%増)・福島大(11%増)が大幅増、弘前大(15%減)・岩手県立大(27%減)が大幅減。室蘭工業大(41%増)の大幅増、岩手大(18%減)の大幅減も目立った。**【関東・甲信越】**情報系学部を増設した一橋大(14%増)、2024年以降に統合予定の東京医科歯科大(17%増)・東京工業大(10%増)が大幅増。一方、東京大は2%減、文科三類(5%減)のみ2段階選抜を実施しなかった。準難関校では、東京農工大(16%増)・横浜国立大(30%増)が大幅増、埼玉大も7%増。一方、前期で共テ負担増(数学1→2科目)の東京外国語大は28%減。この他、群馬大(9%増)・信州大(12%増)・高崎経済大(17%増)が大幅増、茨城大(19%減)・新潟大(12%減)・山梨大(18%減)・都留文科大(12%減)が大幅減となった。**【北陸・東海】**学部改組(地域創造学環→グローバル共創科学部)の静岡大が11%増、情報系学部を増設した名古屋市立大も8%増。一方、金沢大(2%減)・名古屋大(1%減)は微減。この他、前年の反動から名古屋工業大(21%増)・三重大(8%

増)・静岡県立大(16%増)が大幅増。医(医)で後期を募集停止した岐阜大(25%減)や、福井大(39%減)・福井県立大(22%減)の大幅減が目立った。**【関西】**京都大(3%増)でチャレンジ志向が見られる一方、大阪大(1%減)・神戸大(2%減)は微減。大阪公立大(7%増)は市立大・府立大の統合2年目で認知度が高まり、2年連続で志願者数が国公立大最多に。この他、滋賀大(8%増)・奈良教育大(10%増)・和歌山大(9%増)・兵庫県立大(11%増)が増加する一方、京都工芸繊維大(25%減)・京都府立大(12%減)の大幅減が目立った。**【中国・四国】**後期募集停止の岡山大は27%減、広島大も4%減。この他、鳥取大(22%減)・島根大(16%減)・徳島大(27%減)・香川大(21%減)・高知大(24%減)と軒並み大幅減。その中で、山口大(27%増)は前年の反動から大幅増となった。**【九州】**九州大(5%減)が減少、熊本大(1%減)も微減。隔年現象などもあり、佐賀大(10%減)・長崎大(12%減)・大分大(8%減)が減少。一方、宮崎大(27%増)・鹿児島大(6%増)が増加した。

図表6 2023年 国公立大一般選抜の志願・合格状況(2022年を100とした指数)



※データは全て、独自日程で入試を行った国際教養大、新潟県立大、啓教大および芸術文化観光専門職大を除く。文中、増減率は対前年、倍率は「志願者数÷合格者数」。倍率の変化は「2022年→2023年」で示している。

☑入試トレンドをチェック!

私立大一般選抜

POINT

大都市圏の難関大志向が強まる。中堅校は併願減と推薦型・総合型の合格者増が影響、志願者大幅減。合格者は抑え気味だが全体的に倍率ダウン!



本誌6月末集計の私立大530大学、志願者303万8千人のデータ(図表7・8)をもとに、2023年私立大一般選抜の全体像を示していこう。

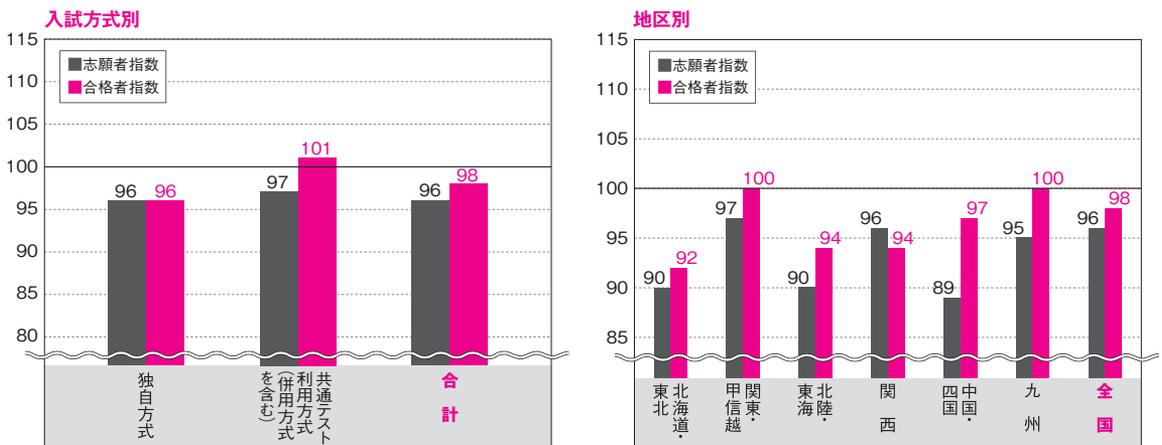
2023年は、全体で「志願者4%減、合格者2%減」、倍率(志願者÷合格者)は2.9倍→2.8倍とややダウンした。コロナ禍以降、私立大一般選抜は2021年に「志願者15%減、合格者7%増」、2022年に「志願者：増減なし、合格者5%増」(文部科学省集計)と易化し続けた。その反動もなく、大学受験生数の減少(2.0%減)を超える志願者減となったが、合格者増の傾向は落ち着いた。

入試方式別に見ると、各大学の独自方式が「志願者4%減、合格者4%減」で倍率は3.1倍と前年並みに対し、共テ利用方式(独自方式との併用を含む)は「志願者3%減、合格者1%増」で倍率は2.5倍→2.4倍とややダウンした。また、難易レベル別にみると、難関～中堅上位校では志願者増も目立つ一方、中堅校は軒並み大幅減と「二極化」したが、いずれも合格者は抑え目に出した。

その要因としては、大きく4つあげられる。

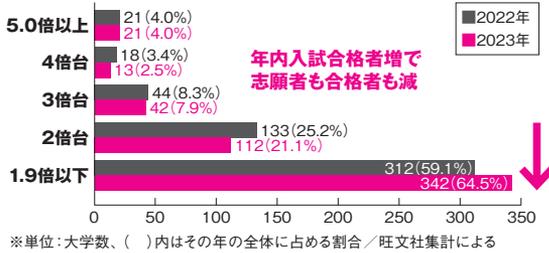
- コロナ禍対応の進展に加え、21・22年の易化が「チャレンジ志向」に結びつき、首都圏や京阪神の「ブランド校」が人気アップ。一方で家計不安から「節約志向」が続き、併願校数の絞り込み(主に合格確保校)に結びついた。
- 共テで3科目受験者の減少が目立った(6%減。共テ全体で3%減)。共テはセ試に比べ、私立大の独自入試とは対策の違いや難度の差が大きく、私立大専願者の「共テ離れ」が進んだ。
- 学校推薦型・総合型選抜で、大学側が早期の入学確保のため合格者増、「志願者4%増、合格者6%増(127大学：小誌集計)」と易化し、入学手続率もアップした模様。一般選抜受験者自体が減少し、合格者を増やす余地がなかった。
- 定員管理の方式が「入学定員の単年度管理」から「収容定員の複数年度管理」に変わり、柔軟な運用が可能になったため、21・22年の合格者増に対し、23年は調整を行った可能性がある。

図表7 2023年 私立大一般選抜の志願・合格状況(2022年を100とした指数)



※文中、増減率は対前年、倍率は「志願者数÷合格者数」。倍率の変化は、「2022年→2023年」で示している。

▶私立大を一般選抜の実質倍率別にグルーピングしてみる



このグラフは、全国の私立大を一般選抜の実質倍率(受験者数÷合格者数。大学合計)のグループ別にまとめて、その校数を2年分示したものだ。両年の校数を比較すると、3～5倍台はほぼ変わらず、2倍台が減少、1倍台が増加と低倍率校で動きが目立った。難関校は人気復活し、合格者も抑え気味。一方、「年内入試」の合格者増が顕著な中堅校は、一般選抜の受験者層が厚みを失い、合格者も増やせないため、志願者減が倍率ダウンに直結したものと見られる。

医以外は「文低理低」状態 上智大・関西学院大が大幅増

【学部系統別の志願・合格状況】

コロナ禍や国際情勢の悪化に伴う経済不安の影響で「理系の資格志向」が強まり、医が増加、農・水畜産・獣医が微増。理、工、薬も小幅な減少に留まったが、新增設が多かった看護・医療・栄養はかえって大幅減。一方、文系学部は法、外国語をはじめ、全体的に志願者減が顕著。「文低理低」ともいふべき志願動向となった。

【地区別・大学別の志願状況】

【首都圏】 難関～準難関校では、共テ利用で3科目型導入の上智大(18%増)、法が「都心回帰」のキャンパス移転を行った中央大(5%増)や、学習院大(9%増)・明治大(5%増)が人気アップ。一方、青山学院大(8%減)・慶應義塾大(1%減)・国際基督教大(10%減)・東京理科大(6%減)・法政大(9%減)・立教大(7%減)・早稲田大(3%減)は減少した。

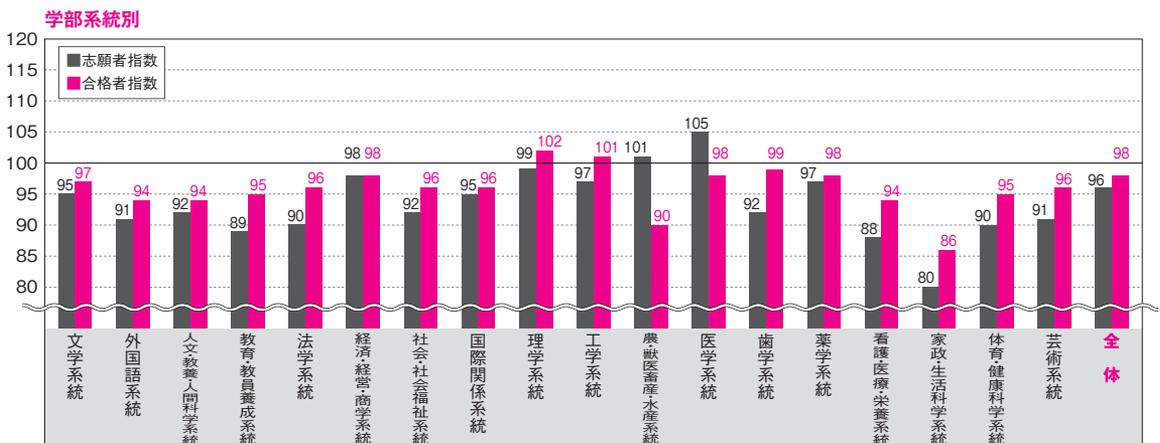
中堅上位校では、駒澤大(5%増)・日本大(5%増)が増加、専修大(3%減)・東洋大(11%減)は減少と明暗が分かれた。また、東京電機大(17%増)・明治学院大(16%増)の大幅増、成城大(9%減)・武蔵大(9%減)の大幅減が目立った。

【京阪神】 同志社大(9%増)・関西学院大(13%増)が大幅増、立命館大(3%増)もやや増加したが、関西大は2%減。また、一般中期を導入した甲南大(14%増)や、龍谷大(9%増)の大幅増、京都産業大(1%増)の微増に対し、近畿大は3%減となった。

中堅校は、佛教大(36%減)・大阪経済大(17%減)・大阪工業大(18%減)・摂南大(19%減)・桃山学院大(42%減)・神戸学院大(19%減)など、減少傾向に歯止めがかからない。

【その他】 西南学院大(10%増)の大幅増に対し、北海学園大(9%減)・愛知大(3%減)・中京大(11%減)・南山大(5%減)・名城大(2%減)・福岡大(7%減)が志願者減。学部改組(教養を4学部に分割)の東北学院大(2%減)は前年の反動が強く出た。

図表8 2023年 私立大一般選抜の志願・合格状況(2022年を100とした指数)



※文中、増減率は対前年、倍率は「志願者数÷合格者数」。倍率の変化は、「2022年→2023年」で示している。

✓入試トレンドをチェック!

2023年入試 志願者数 TOP10 [一般選抜]



国公立大では横浜国立大が志願者大幅増。 私立大は中央大・近畿大で合格者絞り込み!

2023年一般選抜の志願者数上位10大学を国公立大、私立大の別に分けてまとめた。国公立大では2年連続で大阪公立大が志願者数トップ、横浜国立大の志願者大幅増も目立った。一方、私立大では大都市圏志向が強まるも、志願者は増減が各5大学と拮抗。合格者を大きく増やしたのは千葉工業大のみで、中央大・近畿大の合格者絞り込みが目立った。学部等の新設や入試方式の変更、新方式導入など、各大学の主な変更点やトピックスも参考のために併記した。なお、全国の大学の、2023年一般選抜の志願者数・受験者数・合格者数・倍率などの入試結果データは、1227ページからの一覧に本誌集計分として収録しているので、あわせて参考してほしい。

国公立大学	志願者数		合格者数		志願 指数	合格 指数	主な変更点&TOPICS
	2023年	2022年	2023年	2022年			
1 大阪公立大	14,152	13,188	2,817	2,794	107	101	大阪市立大と大阪府立大の統合2年目で認知度が高まる。難関校から併願増か
2 千葉大	10,507	10,631	2,407	2,430	99	99	安定人気、東北地区から志望者流入か
3 神戸大	9,905	10,123	2,484	2,517	98	99	工で募集人員を変更(前期460→452、後期92→100)/大阪公立大の志願者増が影響か
4 北海道大	9,808	9,516	2,521	2,531	103	100	後期が10%増、難関大の貴重な併願先として狙われたか
5 横浜国立大	9,471	7,300	1,678	1,702	130	99	経済で募集人員増(前期140→145、後期80→90)/理工の前・後期で2段階選抜を新規実施/最寄駅が駅徒歩路線開通で利便性アップ
6 東京大	9,306	9,507	2,997	2,996	98	100	理科3類で2段階選抜の予告倍率を「約3.5倍→約3.0倍」に引き締め/文科3類で2段階選抜を実施せず
7 京都大	7,827	7,570	2,731	2,765	103	99	初志貫徹のチャレンジ志向
8 大阪大	7,398	7,501	3,016	3,098	99	97	推薦型・総合型の人気アップ(志願者9%増、合格者17%増)が影響か
9 九州大	7,285	7,692	2,423	2,483	95	98	医(医)の前期で110人→105人に募集人員減
10 静岡大	6,984	6,269	1,759	1,814	111	97	学部改組(地域創造学環→グローバル共創科学部)/教育で募集人員減(前期184→154、後期41→34)/岐阜大(25%減)から志望変更か

私立大学	志願者数		合格者数		志願 指数	合格 指数	主な変更点&TOPICS
	2023年	2022年	2023年	2022年			
1 近畿大	152,457	157,446	34,416	39,438	97	87	前年の志願者16%増の反動/経済の共テ利用前期で5教科7科目目を追加/理工の共テ利用中期で4→3科目に軽減/生物理工の一般前期B日程で学部独自方式(3科目受験、数理2科目判定)を導入
2 千葉工業大	145,128	139,074	42,350	36,224	104	117	SB日程を新規実施、B日程と同日・別時間で実施し、同時併願可。総合問題(数学・国語)で判定/共テ利用後期を3方式に複線化(タイプI=2教科方式、II=数理3科目方式、III=4教科方式)/共テ利用の受験料免除を継続(コロナ禍対応)
3 明治大	108,042	102,426	27,196	26,688	105	102	前年の合格者8%増と倍率ダウン(3.8倍→3.6倍)が人気材料に
4 法政大	99,051	108,280	24,066	22,986	91	105	隔年現象(21年12%減→22年19%増)/経営で英語外部試験利用入試を新規実施/スポーツ健康の共テ利用でC方式(5教科型)を新規実施
5 日本大	98,506	93,770	36,720	36,648	105	100	経営体制刷新で好感度高まる?/芸術・理工・工・薬・生物資源科学(獣医)でN全学統一方式2期を新規実施/商のA方式1・2期で英語外部検定を新規利用/芸術でA方式2期を廃止/国際関係でA方式3期を導入/生物資源科学で学外試験場を削減。A方式1期で2会場、2期で11会場を廃止/理工でCA共テ併用方式を廃止
6 立命館大	91,382	88,335	33,404	32,627	103	102	総合心理で学部個別配点方式(理科1科目型)を廃止、理系型3教科方式を導入。また共テ方式(2・3月選考)で3教科型を追加/産業社会の共テ併用方式(3教科型)と共テ方式(3教科型)で、共テの国語を必須で追加
7 早稲田大	90,879	93,843	15,374	15,021	97	102	教育で共テ併用のC方式とD方式(D方式は生物学専修のみ)を新規実施、初等教育学専攻と生物学専修で独自B方式を廃止(生物学専修は共テ併用のみ)。募集人員は学部合計でC方式120人・D方式10人、独自入試A・B方式を560人→520人に削減。C方式は共テが学科により7~8科目、個別試験(1科目)は学科により「教育・社会・複合文化=総合問題、国語国文=国語、英語英文=英語、理=理科、数学=数学」。共テによる2段階選抜を実施(予告倍率=募集人員の約8.0倍)。D方式は共テ5科目、個別試験は理科、2段階選抜なし/教育A・B方式で政治・経済、生物、地学を選択から除外
8 東洋大	87,094	98,261	30,332	30,341	89	100	隔年現象(21年12%減→22年9%増)/福祉社会デザイン・健康スポーツ科学の2学部を赤羽台キャンパス(東京都北区)に開設(ライフデザイン学部を募集停止)
9 関西大	77,699	79,174	19,286	20,182	98	96	総合情報の全学日程1で、2/1は2教科選択型を2教科型(英国方式・英数方式・国数方式)に分割、2/3に英数方式を新規実施/システム理工・環境都市工・化学生命工の全学日程2で、3教科型(理科設問選択方式=理数重視)を新規実施/経済の共テ併用で、2科目型(小論文<公民>)を新規実施/人間健康の共テ併用で、2科目型(英語)を2/4に新規実施/環境都市工・化学生命工の共テ併用(数学力重視方式、理科力重視方式)、化学生命工の共テ利用後期で、共テの理科を2→1科目に軽減
10 中央大	67,786	64,794	17,305	18,561	105	93	前年の志願者17%減の反動/法が「東京都八王子市→同文京区」にキャンパス移転(都心に茗荷谷キャンパスを新設)/総合政策の一般方式で、国語の出題範囲から古文を除外

※志願指数、合格指数ともに、2022年を100とした指数

※私立大は独自方式、共通テスト利用方式の合計

※合格者には追加合格を含む